

Karl Mannheimの知識社会学と その後の知識社会学

月 光 恵 雲

(I)

Karl Mannheim は Ideology and Utopia の論文を公表することによって知識社会学に対する彼の立場を明らかにしたことは衆知の事実である

彼にとって知識は人間が環境に適応する機能を持っている。環境は常に同一でないで、知識は同じ物であり、同じ方法で働くことを期待されることは出来ない。社会環境は種々の階級に組織されている。歴史の最も重要な点は種々な階級による政治経済力の競争である。適応手段としての知識は階級的に組織されているので、相対的でなければならぬ。

次にマンハイムが知識社会学について述べている見解を述べよう。

知識社会学は存在と知識との関係を分析する理論であり、人類の知的発展の中でどのような形をとるかを追求するものである。行為と思考との相互関係を決定するのに有効な基準を発見することを目標とし、現代の状況に適し、知識の中にある非理論的条件要素の意義に関する理論を発展することを望むものである。今日一般に普及している科学知識の効果のない、漠然とした相対主義に打ち勝つ努力である。研究の対象は社会事情と知識との間の関係として特色づけられる全ての現象である。対象領域内では事実と関係を区別されねばならぬ。事実は伝達された精神現象であり、関係はこれと社会との関係である。精神現象は予想、思考結合、哲学体系、絵画の創作までの発想、感覚、精神過程の全体に関連するが、精神現象は知識と同一でなく、思考と感情と同様に知識を含んでいる。精神現象の伝達方法に文字がある。社会は集団、個人、制度を含んでいる。知識社会学は知識と社会事実の理解との大きな複合体である。理解は研究者や読者の概念領域に伝達された精神現象を主観的に考えられた意味の受容である。その受容された精神現象は知識と社会との直接間接の関係を形成する。それを研究テーマによって選定され、公式化される。又は研究者の概念領域内で再現される。理解の此の過程は知識社会学者が確かな対象を発見出来る状態にある時に始まる。一方の知る人が言う事を聞き、他方の知る人が取り扱っているテーマを聞き手と関係させる一定領域で知る人の確実な態度、知識の立場の完全な像を維持する事を求める。知識社会学者は今まで漠然とした研究事実内部の要素を公式化し、それを研究解明の基礎として観察する。その事実は心的意味の事実である。一の関係は心的意味に於ける事実である。知識社会学者はよく知っている理論の中で確実な対象に対する確実な態度を認め、此の態度に関して他の理論を吟味する。その時これ等の理論の間の関係を見出し、此の関係の性質を確認しよ

うと試みる。この事は概念数の解明に間接的に貢献する事が可能である。此の概念の応用性が証明されることが出来る。即ち一状況のもとでの関係と事実から新しい関係と事実に到達し、発展した問題と解決を発見する。この解決は問題の明確な答でないが、新しい問題が起こらない限りその理解に満足している。

此等の全過程の中で社会学者は概念を用いる。それによって新聞評論の読者間に何等かの関係があることを認めている。人は理解の過程だけが知識社会学を特徴づけているとは認めない。実際には知識社会学の方法は他の社会科学の方法と区別されることは出来ない。知識社会学が他の社会科学から区別されるものは日常的意味での方法、即ち関心と概念と方法との結合である。方法ばかりでなく対象もどのように常に一定であることが出来るか見きわめることは困難である。理解は精神現象の一要素の理解と精神現象全体の関係の理解と区別される。我々は一般に理解する時に全精神現象の内部での全関係に於いて要素又は現象が理解される。この関係が態度である。態度は既に作られた行為と反動の型を意味している。我々が精神現象の一要素を研究する時に、此の要素を含むところの態度に出会う。基本態度は或る精神現象を理解しようとする時に示される。全すべての個別の補充的対立的態度を理解しようとする態度である。一基本態度の理解へ我々の方法の影響によって典型化された行動は理解の具体的事例と区別される。その行動の中には我々の関心、論理的に考える能力、我々自身の理解の試みによって巻添えとなる態度の強度によって影響されるものも含まれている。また一般的に個別的に非常に相異のある直観力の態度の一要素からその集団に向う場合もある。このような過程がどのような過程がどのように進んでもかまわないが、此の両極端が次のような典型となる。即ち精神現象に対立して完全な疎外の感情の一面であり、他面では精神現象との同化である。然し経験的に前者は殆んど存在しないので、後者と同様に把握されない。それ故に一面では要素又は観点であり、始めから我々はそれを理解している。そうして他面ではどんな方法によっても理解出来ない。その上我々は一の立場から習慣的に研究を行う。極端に総括的でないが、現象の個々の特徴又は一局面に関係がある。最高の理解をするところに此の目標が我々に明らかになる。そうしてそれを利用することが出来る。その時に我々は基本態度としてそれを公式化する。我々は一定の理論即ちそれについての疑問を含むものを理解することを試みる。それ故にまれにしかない事例に十分に忍耐して、時間をかけ、関心を持つことで、事実の知識と方法論の基礎となる多くの資料を得ることになる。我々は理論で述べられる行動を十分に知るだけの能力を持つことになる。更に重要な研究によって次の事を知らされる。

我々の課題が何であるか、我々は何を見逃がしているか、我々は基本態度の概念を何時実現されるか、それによって意識された方法と能力から研究を実行するようになる。表現「態度」は矛盾しているが、他面では心理学的「態度」より多くのものを含んでいる。その事は立場又は位置よりよいと思われる。主として意図的なものを思わせる。即ち仮説構造として同じ意識領域であるが、合理的なものだけをわからせるのではない。次の二つの観察は基本態度の概念を具体化するのに役立つ。

1. 我々は我々に伝達された精神現象から出発し、その創造者の行動を理解しようとする時、基

本態度の研究は個人の態度を予見する能力を我々に与える。それは我々が自由に出来る精神現象の中に現存しない。我々はこの能力を持っているならば、一定の理論は対象をどのように取扱うか、又は個人は此の状態の中でどのように行動するかを述べている。我々が要素や局面を多く知っていればいるほど、我々が研究している基本態度を公式化することが出来るまで理解を達成することは確実である。我々はますますそれ等を同化する。概念化は科学的理解と同行を区別する。我々には他人に対してどのように行動するか、どのように一冊の本を読み、絵を観察するか、作曲するか、又は聞くことを知らない所以我々は日常生活の中で基本態度の概念を応用せざるを得ない。例えば人の死臭を知ることによって死臭の感覚を生じ、人の死を予言することが出来る能力を持つようになる。その人から人は死の予言を期待することが出来るが、自分自身からは期待することが出来ない。

2. 知識社会学の基本態度の概念の特別の意味は伝達された精神現象の内在的と社会学的解釈との選択を知識社会学は止揚する能力を持っている。それだから基本態度の解釈を両方の面でなされねばならぬ。基本態度に関連する一要素を理解するために当然その意味を知らねばならぬ。そうでないときには全精神現象の内部の要素の機能を考える。我々は分析の中で潜在的、顕在的に社会を目標とし、精神現象を条件づける。又条件づけられた科学者は観念領域の概念領域の要素への基本態度を作り、彼等が概念を書き、用いた。それはその概念と概念領域の中で拮がった。此の概念によって手段や結果を合理化する。それによって精神現象の理解への関心はそれらとの同化しない、更に広い概念に導入される。それが基本態度である。典型的な基本態度は経験的に見つけることの出来る基本態度を一定の型に還元することから得ることが出来る。型の変形として観察される経験特色を除去することによって得られる。典型的な基本態度は非経験的であることでなくて我々は典型の変形として経験的に確認出来る混合基本態度を取り扱うことである。宗教人、科学者、有能な実業家のような概念は典型的な基本態度の構造と同じ種類の理想典型的な構造である。我々が宗教人、科学者、有能な実業家として特質を示すところの大部分の個人の中に宗教的、科学的、有能な実業家でなく、理想典型構造の変形として取り扱う態度を発見する。我々が典型的な基本態度で活動する時に精神現象の研究で我々の理解を容易にする。これらは独自の構造によって理解される限り自律的である。基本態度を実際的と理論的との二種類に我々は区別する。実際的典型的な基本態度は具体的事実又は状況に志向される—それはそれを守り、それに順応し、それと戦う。即ち立場の三重の可能はその特徴である。

常にあるものでないが、しばしば両極端の代表者（防禦と戦い）は人間として一定の社会集団と同化されやすいが、その人は一つの状況に満足する。実際的な基本態度の例として身分的なものが述べられ、家来と同様に主人を認める。全体主義対民主主義、無政府主義対帝国主義、社会主義又は共産主義対資本主義を述べられる。理論的典型的な基本態度は精神問題の解決に志向されるが、実践の世界で此の解決の活動、使用、理由に関連しない。その特徴は、実際的な基本態度の三つの本質的可能性はそれらに本質的に固有のものではない。それらが起る場合に精神状況に関連するが、実際状況に関連しない。理論的、実際的な典型的な基本態度と経験的、典型的なものとの

結合は多くなる。理論的と実践的なものの特徴は理解を促進するよりも妨げとなる。即ち実際問題に理論的解決が応用される態度が実際の態度である。その代表者の典型的な社会活動を特色づけている態度とそれらと同化することは当然のことである。それによって我々は職人、技術者、僧侶、農夫の態度を得る。我々は理論的典型的態度によって魔法的、宗教的、芸術的、科学的、哲学的な態度に分類される。実際的基本態度の多面性に対立して此の五つの態度は精神問題への研究方法の基本的可能性を使いつくす。それらは仮に基本的人間態度と名づけられる。

魔法的なもの、先づ観察せられた態度を定義する試みで、此の態度のある感情と我々の固有の解釈を間違えるべきでないことを方法論的に述べられねばならぬ。魔法的態度の場合にはその態度は我々自身の態度に関係なく、魔法行為が実行者にある意味と我々のその解釈とを同一視していけない。五つの基本態度の主たる意味は精神現象の理解によって基本的に相互に還元出来ない関係性としての相異にある。我々はきびしい魔法行為の観察によって新しい完全な悔いを心配している時に我々は次の事を意識させられる。

即ちこの感情は実行者の感情であり、それを考えこむ傾向があるが、この傾向をゆるめることを企てると、反対に我々の感情的関心は実行者に役立たねばならぬ。それ故に我々は後の理解の為の基礎を有していなかった。そうしてそれは概念的に伝達される。即ち魔法行為の論理構造の単なる分析は感情面を理解しない。観察せられた、また書かれた魔法態度と読者を同化する意図で企てられた魔法の人類学的、民俗学的研究は真実の関心と理想的なそれとの混同として魔法を定義する試みとして非常に意義のある記述を作った。かような定義は実在と理想の我々の固有な立場からのみ正しい、魔法態度の理解の困難の一は次の事実にある。文明社会の中で少数の魔法態度しかないので不明確な公式となる。

宗教的なもの

基本態度を定義するためにあらゆる努力を特色となるすべての条件と共に宗教的なものは超力の、聖なものとして感ぜられる現実との関係を求めるものとして宗教的なものが述べられる。

芸術的なもの

人は靈感によって美的に芸術を決定し、直感的に芸術と名づける時に、人は概念のみを書き替えるが、芸術家の態度が経験しなかったものは少しも言わない。人が生活に喜びを持つ生活の意義は美的評価の態度である。しかし概念が芸術理解に役立たないと言わない。確かな読者は独自の体験を思い出し、それで芸術家の態度の自律性の理解を容易にする。

ユーゴ・フォン・ホフマンスタイルはロマン派の芸術家の態度の特有の性格を伝えた。その時彼は「魂は恍惚の中以外には一諸にいない。汝自身はいづこにありや、汝が甘受した魅惑の深淵に見出される」と言った。強調されるものは叙情、通俗文学、劇、教養芸術、芸術家の生産様式と同様に音楽等の本質の経験、すべてのもののの中に表われる知識の本質の経験は芸術家態度の外部では得られないし、理解もされない。

哲学的なもの

ハイデッカーの形而上学の基本問題の公式化はこのように哲学的態度が特色を示している問題

の公式化として有効である。哲学は未知についての精神情緒に関するアリストテレスの適切な言葉で始まった。即ち不変の実体の何らかの事実がそこにあると。哲学の思考活動な世界全体の基礎と原因がどのように与えられねばならぬかの問題を常に究極の目標とする。世界の本質構造がこのように可能である。全すべての形而上学、倫理学、美的理論は究極的に哲学的態度内部で理解されねばならぬ。

科学的なもの

科学的態度の有名な言葉はガリレーの「Eppur si muove」(それでも地球は廻っている)である。ジョン・デューイ(John Dewey)は「科学の資料と手段は健全な人間の理解力の直接的問題と方法からあらわれる」と言っている。科学の対象は媒介し且媒介される。それだけで終わっていない。基本態度の概念と典型的基本態度は知識社会的理解力に属する。次に二、三の概念について述べられる。

我々は確かな限界まで空間的・時間的隔たりを考えさせられることをここで注目せねばならぬ。二百フィート以上我々から離れて、我々の位置からの隔たりが限界を越えてある事物を等距離と同一平面にあるものとして考えていると同様に我々の考えによれば事物の存在は或る時間でこわれ、現在から長い時間を経、現在が同じ時間の隔たりであり、時間の特定の時に同じように移動したと我が考える。現在から遠く離れ、時間が余りに経ているので、観念的に我々によって確かめられることの出来ない事物に対してかっとなるが、その時我々はこの事物は相互に長い時間を経て分離されることを洞察出来る。

上述のマンハイムの知識社会学に対する論述は知識社会学の対象とその範囲と関心と方法、基本態度の理解と解釈を示したのである。基本態度の定義には特にマソクス・ウエバーの主観的意味理解の行為の典型を継承している。このような見解やイデオロギー論は共にマルクス批判を中心としてなされたものであり、その時代のドイツの社会事情に非常に影響されている。

(II)

ジンメル以来のドイツ社会学の発展はマルクス批判とマルクス継受と共に歴史主義の問題に由来するところが多い。特に文化、又は知識社会学は精神生活の、社会経済の条件の認識で始まる研究方向は歴史意識とマルクス主義批判から本質的に考えられている。あらゆる認識が完成される具体的生活関係の認識の結果と認識過程の条件の意識は文化社会学研究の多様に反復されている基調である。ドイツ社会学の観点から歴史主義とマルクス主義が相互に結合するものは表現現象の背景となる存在領域としての精神範疇と構造の理解である。意識から存在への還元の理論としてマルクス主義の継受は此の理論に還元された理解を示し、歴史主義とマルクス主義はかような還元の仮説のもとに比較されることが強調されている。マルクス主義と歴史主義の相異は存在の決定にある。マルクスによれば、全すべての社会現象の具体的全体の意味で、人間生活の生産と再生産の過程で出発点を形成するが、歴史主義で人生観、知性、空想、感受能力によって経験出来、そうして経験を再び可能にし、強制する範囲即ち生活関係が歴史の中にある。経験科学と

して理解される生命哲学はジンメルからトレルチ・アルフレド・ウェバーとマンハイムに至るドイツ文化社会学の共通の基礎である。体系的精神科学の彼等の解釈学は歴史を通じて経験の媒介で生活の自己理解を尋ねた。精神的個人的客体化が帰せられる基体は歴史主義とドイツ社会学の中にある生命哲学に向けられるヘーゲルの国民精神の概念である。文化科学の中に歴史主義の形成に本来参加したドイツ歴史法学派は一定の国民全体の形成として人間の種々の生活領域を理解しようとしていた。法、宗教、経済等にはそれらの表現をうらづけている有機的本質力である。それと共にドイツの精神科学的社会学は心理学的に志向されたデイルタイの世界観類型論によって強く基礎づけられた。特にマンハイムの知識社会学はこの事実が明らかであった。即ち彼はデイルタイと同じく社会存在と同一視した生命の概念を用い、一定の性質の生命の空間の中で一定の性質の生命体の生命浸透の機関として理解される認識過程の背後に思考を修正している基礎として精神の反理論的行動主義的傾向、生生とした意欲力と立場も集合意志関係がある。此の提案がそれらの用語の中で次の事が明らかである。即ち社会は集合的衝動群による内面的本質を示すとの概念によって生命空間が決定される。デイルタイの世界の型は生命行為、生活経験、我々の精神全体の構造から生ずるようにマンハイムによれば生命範疇は人間世界の領域の中でいたる処に常に有効であり、時空間的に限定された出来事が起こることが出来る。ヘーゲルの国民精神の概念はマンハイムには実質的動的実体と考えられた。ジンメルにはそれに形而上学的性質があると考えられた。歴史の動きの基礎と解明され、史的内在であれ、不合理な事実性は無限と多様性の限界を越えて形而上学的範疇の品位の何かを再び得るであろう。不合理な生命意志の原則から世界や生命のシュペンハウエルの意味へのデイルタイの共鳴で歴史主義の特徴を示された。シュペンハウエルの孤独な立場や偉大さは彼のこの経験から生じた、直観を独断的に世界を解釈するのに利用したが、音楽の一種によってそれらを越えようとしなかった。世界は有限の形における理解力に此の時代の思想家から首尾一貫しているように思われた。彼はそこから世界の解釈を実行することを企てた。客観的精神はヘーゲルの考えたようにデイルタイによって制度化された社会秩序として、人間の対象された活動としてでなくて形而上学的原則の客観化として理解された。此のいわゆるヘーゲルの精神主義の精神概念に対するデイルタイの論争はシュペンハウエルの反ヘーゲル主義に主として基礎づけられていた。これはヘーゲルの墮落した樂觀主義に反対したので、デイルタイは具体人間の存在でヘーゲルに対立した。ドイツの文化社会学の生命哲学的傾向は歴史発展の概念に対して次の結果となる。

方向とその中に付いている要素—進歩の要素—自動変動の単なる形式的力本説の陰にかくれる意欲—衝動力本説。

どのようにしても経験出来る意味でなくて自転している運動は歴史の中で完成される。いわゆる目標を知らず、緊迫している、不安な生活である。歴史は決して真実ではない。歴史に意味と真実がある時には創造的に活動し、その生産中に見捨てられている人間の魂の中にのみある。偉大な個性の創造的展開即ち外部の強制からの内部の自由は精神科学的解釈のテーマである。その中で真実の世界が先験的傾向への失われた関係の光の何かが輝いている。トレルチによって明ら

かにされている。有限のものへの形而上学的、単子論的解釈—超歴史的なものは絶えず取り巻く—はデイルタイの説の中に潜在しているが、ジンメルによって明確にされた、文化綜合の努力の中でドイツ知識社会学が形而上学的良心に訴えた、シェラーやマンハイムによってより高い第三位置からマルクス主義の批判と共に歴史主義の相対主義的結果の出会いに由来する多くの主張がなされた。少くとも此の点で知識社会学がデイルタイによってその決定的衝動を受け入れられた精神科学の方向に属するものと示された。今日まで文化科学と哲学が基礎危機を洞察し19世紀以来歴史主義と相対主義の現象の論争を続けている。文化客観化の心理学類型化の道で次の事を証明する試みはデイルタイから始まった。歴史の決定的修正にかかわらず人間の性質は常に同じであるので、人生経験の特性は常に共通していなければならぬ。デイルタイの精神科学の基礎は18世紀の啓蒙主義の一般理性の歴史化を求めることによる人間の性質の第一義的静的概念である。その中心的問題は一つの類型学の中で人間の表現形体と物の変化の固定に向けられた。その目標は歴史現象の多面性の中で発見が常に繰り返される基本構造である。それ故に歴史の単一性は科学者の単なる主観的理性の要請にすぎない。

果てしない歴史的出来事からどんな性質の意味を見出すことが出来るか、ドイツ知識社会学はその独特の分野で歴史主義の相対主義の一面に立ち向う努力によって特徴づけられている。デイルタイと同様にジンメルによる独特のドイツ知識社会学の先駆者は生命関連の流れの中にすべての歴史現象を投入し、歴史の中の不合理な要素として生命概念の真実—不真実の二者択一—が存在する。主観と客観のモーメントの間に存在している伝達の分析の努力は普遍的に現われる相互作用の主張の為に進められる。関連した動的に運動する生命は絶対者にまで具象化された。ジンメルは認識論的理想主義と共に唯物主義と抽象的理想主義の立場を越えようとした。トレルチ、シェラー、マンハイムのようにジンメルは第三のより高い所に生命が現実をゆがめている体系からの脱出口を求めた。生命は主体と客体、私と理念、存在と意識と間に伝達している原則としてジンメルの論文の中に働いている。そこから全すべての概念的思考によって決定された相異は派生の末端ではかなり大きいように思われる。その事は社会学的自然法によって述べられる。存在と当為、現実と価値基準形成はその本質によって分けられていると同時に精神内容は発生した基盤によって特色づけられた。そこにトレルチは創造力や精神の独立のための証明を見つけた。その事は理念と社会制度との相互作用を可能にする。研究者の範疇形成によって歴史事件に一つの意味を与える試みは観察者の立場からと文化圏から企てられることが出来る。けれども全社会的、普遍的な歴史経過の意味全体に対する科学的証明ではない。かような全体性の考えは歴史哲学思考の無言の前提を形成する。個の全体の発展は意味発展であった時、人間性の中で全体的に関連し、分離することが出来ない発展は意味発展でなければならぬ。個の意味は全体に完全に流入することによって意味であることが出来る。そうして全体の意味である時人間性の有意義な発展体である。その立場から全すべての歴史的に考える時代はその特有の立場を含めて、またそれを目標として全体の意味を示さねばならぬ。その時人はヘーゲルによって基本結果を見つけたと確信しない。人間の精神を生成する意味統一体として理解する。全すべての場合、歴史思想家はかような構造を通

じて人間の意味統一体の中に独自の現在と未来を組み入れ、人間が人間の独自の立場からそれらを広く考えられねばならぬように全体から発展する。トレルチは此の考えを文化総合の問題に導いた。それがマンハイム以後の知識社会学に適切となった。

文化総合は過去の精神や文化の歴史の現在化から思想のためばかりでなく、現在と未来の実践のためにその時の状況の中で正しい行為に対する刺戟と同様に説明を得る。それは歴史家の実践理論の要請であり、トレルチにとって歴史主義の問題の克服への有望の道である。とりわけ過去と現在との間の接触の中で独自の究極の決定基準が形成される。同時に未知の無限の未来の中に未来形成を行う。文化総合は飛躍である。それによって我々は独特の決定と責任の中で過去から未来に達する。またマンハイムは彼の歴史条件の分析によって歴史主義を相対化するであろう。彼はそれを世界観として解釈した。それが形成され、中世の宗教に結合された世界像は分裂され、その後そこから生じた啓蒙時代の世俗的世界像は超時代的理性の基本的思考で止揚される。彼の進歩的歴史主義の計画は独特の構想の前提で失敗した。新しい総合の支持者として自由に動いている知能の採用は抽象的、無限の進歩として歴史と単なるユートピアとしてその意味は考えられる。その真実の中で歴史的に条件づけられた展望の組織的性格を認識するマンハイムの探究は存在と結びついているものとしての一般的主張によって失敗したので、彼はイデオロギー問題を解決することが出来ない。それ故にイデオロギー的として定義される思想の欠点のある存在妥当性はイデオロギー的なもの以外の個の立場の適切な決定の仮説のもとに確認された。マンハイムの手がかりから相対主義による歴史相対主義の克服はほとんど可能ではない。歴史懐疑とイデオロギー概念の一貫した究極思考からマンハイムは二者択一の向う側の彼の位置の安定、形式的アポリアリズムまたは実証主義を期待し、彼に実行されることは出来なかった。むしろ彼は形而上学に執着していた、形而上学は生成する絶対ドグマ的に固定する働きをする、シェラーは次の事によって歴史主義を克服することを求めた。即ち彼は発生と妥当性の領域を初めから存在論的に分離したものとして決定した。それによって歴史過程と社会過程は精神内容の実現または非実現に対してかなり適切であるが、その妥当性に対して適切でなくなる。そこからシェラーは歴史構造から独立し存在している現実の否定によって歴史的論争の根拠をくつがえした。歴史は歴史家の生産物を述べる時に、歴史主義の意味で相対化ではない。相対化される関連面は単なる仮想として示される。シェラーにとって形而上学的であるが、歴史的即自物ではない。歴史事件の事実過程の洞察での各自の努力の必然的展望から彼は次の如く推論する。即ち第一に歴史記述はその対象、歴史を自ら生ずる。即自的に存在している歴史的現実の非存在の結論は決して説得力がない。人間が過去から作ったところの像は歴史的変化の中で、またそれによって構成される。

たしかに歴史として表現されるものを使用出来る精神的範疇の媒介の中でのみ理解される。その範疇は一定の歴史位置の価値を有する。あらゆる場合に歴史経過の面と展望像が次の仮説の下にある。即ち全ての展望から独立している何かがあり、そこにその対象と関連するものとしての一面がある。即ちトレルチやマンハイムが強調した事実である。歴史科の対象のシェラーの否定は真実の問題の評決に対応する。主体と対象との関係の除去によって歴史像と意味の認識価値

を客観的基準の助けで作り出す能力を初めから否定した。歴史的事実と関係は認識する理性によって再検討出来ないように思われる。それらは研究している個人の精神の経験の媒体の中にある。その恩恵によって歴史は存在するであろう。それ故に心理学化している解釈の結果の中に次の事がある。即ち特有の意味の中で歴史を話され、歴史の中で証明された事実と出来事は歴史像に凝固される。それ故に歴史は研究者のエトスによって歴史的事件の個人的評価の機能となった。客観性は研究者気質の問題即歴史家の単なる要請となる。史誌はテオドル・レッシングの歴史理想主義の中で歴史過程の第一理由にまで前進した。歴史像は歴史の中で創造的役割を維持する。ここに芸術作品に類似して歴史が展開され、意味のないものに意味を与えることになる。主観主義的歴史対象領域の理解は大部分の知識社会学的立場から形成される。ここに述べられている方法は Hellmut Diwalds の歴史リアリズムの研究の中での科学的歴史研究の要請を示したものである。Diwalds は歴史の批判的分析に努力し、歴史リアリズムの直面した事は歴史はその意味に依存するものでなくて、それから独立した結果に到達した。彼は歴史的根源が示すところのものは認識の意味で明らかに即自的なものであると理解した。歴史の即自的であることは歴史は歴史の観察から独立して進行するがままに進行する。我々が歴史推移をどう見るかではない。歴史家が歴史再建に努力する時に、歴史的存在の中で歴史家から独立した存在を見ねばならない。勿論人は物として対象を見る。此の対象は認識関係によって生ずるが、対象は歴史の中で反対の側にあるものである。研究者と歴史的根源との関係と同時に歴史と独自の現在への歴史家の関係が大切である。

歴史理想主義の Diwalds の批判は人が対立されるものに対して漁夫の利を得る立場が問題でなく、客観的仮説の正確な記述を求めている。

(III)

フランスのギルヴィッチ (Gorges Gurutch) は知識社会学を次のように定義している。

知識の種々の体系と社会の組織との間の機能的相互作用の研究が知識社会学の第一目的である。その組織の部分的、世界的社会構造はこの研究の中核であるが、それ等は他の文化的生産物、社会統制と共に構造組織の中で知識が果たす役割によって促進される。その基本的課題が解決される時、知識社会学は次の事を研究されねばならぬ。

1. 知識の型の種々の体系と他の文化的生産物の体系と種々の社会規則との間の関係。
2. 表現、通信と知識の拡散の種々の型。
3. 知識の役割と種々の型の社会でのその機能。
4. 分化され、統合される特別の集団、階級世界的社会の型に相応している種々の型の規則正しい傾向。
5. 分極作用、曖昧さ、辨証法的補充によって創造される、相互に関係のある知識と社会体制との間の分裂の特殊なケース

上述の項目の因果関係の研究は知識社会学と認識論の問題である。知識に関しては次のように分類している。

1. 具体的、特殊な時空間における像の凝集の総体を外部世界の知覚的知識は要請する。
2. 意識のある判断によって立証されるものとして知覚された他者、我々、集団、階級、社会の知識は知識の特殊な形を示す。
3. 常識
4. 技術的専門知識
5. 政治的知識
6. 科学的知識
7. 哲学的知識

これ等の知識の各型の中で種々に力説される知識の形の五つの2分法がある。

1. 神秘的知識と合理的知識
2. 経験的知識と概念的知識
3. 象徴的知識と具体的知識
4. 集合的知識と個別的知識

此の知識の形は知識の型や認識体系の中での変動を特色づける時に役立つことが出来る。

ギルヴィッチはこれ等の知識の型又は形を用いてミクロの知識社会学とマクロの知識社会学を主張している。ドイツと共にフランスでも知識社会学は発展したが、アメリカ合衆国に於いてはプラグマティズムを社会思想として重要な役割を果たしていた為に容易に受入れられなく、その上にフロイドの心理学の影響もあり、知識社会学の学問としての合法性について Arthur Child を初めとして大いに論争されることになった。チャイルドは理論的にどのようにして可能となるか、知識社会学の合法性を確かめられない時には問題を論じて意味はない。問題は知識社会学の合法性の仮説の下に起きるのである。確かに思想は何等かの方法で社会の影響があり、与えられたものとして社会の確実性を認める。それは少なくとも先験的要素によって社会の確実性が認められる。社会の確実性が成立する三仮説が見られる。

1. 思想は一要素によって決定される。
2. 多くのものの中で一要素が働く。
3. 一つのものによって多くのものが働く。

その思想は地事情や国籍、人種等によって異なる限り第一の可能性はありえない。然し同じように第二はそれらを拒否されない影響は特殊な社会史的関連内部の少数のものにある。又第三の可能性だけが残る。此の要素は多くの他のものによって働く、社会的なもの以外のものであり得ない。最後に選んだものは適切な理由を持っている時、要請された懐疑の論争を否定するが、少なくとも量または意味においてそれは可能である。社会の確実性の客観性の基礎を伝える時、人は思想や感情が社会的であることを示すことが出来る。

ジョージ・ハーバード・ミードは次のように述べている。思想や感情は社会的起因を持っている。普遍化された態度の中に感情が存在する。知識や思想の社会的確実性は論外である。また社会的立場からの思想の解釈も問題ではない。加えて思想は社会過程である。社会外にあたえられる何

らかの先験的決定要素は社会現実の媒介によって思想と感情を決定することが出来る。ミードの理論を引きついだ時、三条件が述べられねばならぬ。

1. 理論は思想の社会解釈を正当化する。
2. ミードの社会解釈の正当化は社会解釈の程度と意味の問題と同様に客観的決定の間の相互の影響の問題、思想に内在している論理と有機的に個別化され、精神の自発的活動を省みられない。結局ミードの理論である。

3. 研究に対する提案

チャイルドは知識社会学の理論的可能を示さず次の事を示していることを認めている。

ミードの理論は少くとも社会解釈の可能性を確かめることが出来るが、チャイルドの論述は合法性の定義を欠いた。合法性について次のように言うことが出来る。

1. 知識、社会とその関係の特性の確認への手段として知識社会学の妥当性は形而上学的理論にもとづいて示される。
2. 具体的現象への手段として知識社会学の妥当性、それは限定的に知識社会学の対象に属する。そのような妥当性は前者に対立して知識社会学の理論の経験的試験によって示されることが出来る。合法性の二つの意味即ち形而上学的なもの和方法論的なものとの間の合法性の区別を怠っている。チャイルドは知識社会学の合法性を示さなかったが、示したかのように知識社会学の問題と取り組んでいるのである。アメリカの社会学者は一般的に知識社会学の形而上学的のものより実証的に科学として成立するかを論争の中心としていることはチャイルドの学説を見ても明らかである。

次に Robert. K. Merton の知識社会学に対する見解を眺めて見よう。

彼の知識社会学に対する分類表は次の如くである。

1. 精神生産物の存在基礎は何処にあるか。
 - a. 社会的基礎—社会的位置、階級、世代、職業的役割、生産品の型、集団構造、歴史的状況、利益、社会、民族関係、社会移動、権力構造、社会過程
 - b. 文化的基礎、価値、気風、思潮、国民精神、時代精神、文化の型、世界観等
2. どんな精神生産物が社会学的に分析されているのか。
 - a. 範囲、道徳的信念、イデオロギー、イデー、思想の範疇、宗教的信念、社会規範、技術、
 - b. どの面が分析されているのか。選択、抽象の基準、前提、概念内容、実証の型、知的活動の対象等。
3. 精神生産物がどのように存在基礎に関連するか。
 - a. 因果的、機能的関係—決定、原因、対応、必要条件、調節、機能的相互依存、相互作用、依存等。
 - b. 象徴的、有機的、意味関係—一貫性、調和、統一、適合性、両立性、表現、象徴的表現、構造関係、構造的同一性、内部関連、形式類似性、論理的意味統合、意味の同一性等。
 - c. 関係を指定する曖昧な用語—対応、結合、密接な関係等。

4. 何故関係するか、この存在的に条件づけられた精神生産物に与えられた顕在的、潜在的機能
 - a. 力を維持すること、安定の促進、志向潜在的、実的社会関係、動機づけ、行為方向、批判現転用、反対の回避、再保証、自然の統制、並立的社会関係等。
5. 存在基礎と知識の関係は何時与えられるか。
 - a. 歴史理論
 - b. 一般的分析理論

上述の項目は知識社会学を研究するのに十分に役立つ事が出来るとマートンは力説している。またマートンは知識は民族の信仰から実証的科学に至るまでの幅広い範囲で考えられると言っている。知識は文化と言う言葉と同一視されがちであるので、正確な科学ばかりでなく、倫理的信念、認識論的要請、物的判断、総合的判断、政治的信念、思想の範疇、終末論の宗教的見解、道德規範、存在論的仮説、経験的事実の観察が实际的に規定されるように考えられる。この種々の知識が社会学的関係に於いて同じであるか、または此の関係が知識の型によって異なっているので精密に知識の範囲を区別することが必要であるか問題である。此の問題は体系的に曖昧でありがちである。マルクス・エンゲルはイデオロギーの上部構造は物的基礎で種々に異なった条件の下にある種々のイデオロギーの型を含んでいることを認めている。この問題についてのマルクスの失敗は上部構造によって含まれているものや此のイデオロギーの領域が生産の型に関連する方法を明らかに出来なかったからである。エンゲルスはこれを解明に努力した。イデオロギーの用語を分類する時に幅広く考えた。彼が述べている如く、イデオロギーの上部構造即ち哲学、宗教、科学は既存の知識や信念によって抑制され、間接的、究極的に経済的要素によって影響されることが真実となる。此の分野で歴史的状況の分析からだけで信念や知識の発展や内容を引き出すことは不可能である。マンハイムは存在決定から正確な科学や形式知識を取り除く程度まではマルクス主義の伝統に従ったが、日常生活の考えや歴史、政治、社会科学を考えることで従わなかった。社会的位置が展望即ち、人が物を見るところの方法、人がその中で知覚するもの、彼の思考の中でそれを解明する方法を決定する。世界観は有機的成長をなし長期間に発展する。それは理論によってほとんど影響されない。シェラーは適切な証明もなく、世界観は人種混血によって又は言語や文化の混合によって基本的に変化することが出来ると主張した。人為的知識はゆるやかな変化をしている世界観の上に築かれ、七種類に分類される。1.神話と伝説。2.土語の中にある知識、3.宗教的知識。4.神秘的知識の基本型。形而上学的知識。6.数学、自然、と文化科学の実証的知識。7.技術的知識。知識の型が人為的にあれあるほど、知識は急速に変化する。シェラーは次のように言っている。宗教は形而上学よりゆるやかに変化する。形而上学は刻々に変る実証科学の結果より持続する。変化率の此の仮説は文明の変化は文化変化を追いぬくとのアルフレド・ウエバーの命題に従い、物的要素は非物的要素よりも早く変化するとのオクボーンの仮説に従っている。知識の定義の問題を取り上げても種々の論争があり、マートンもパーソン、ソロキンと共にシェラーの知識社会学を中心に論議されているように思われる。

ズナニキ（Znaniecki）は知識人の役割の類型論を述べる時に、この役割と涵養された知識

の型との間の関係に関する一連の仮説を発展した。研究の或る問題に科学者の目を集中することで社会構造は益々科学に影響しなくなったと仮定されている。

要するにアメリカの社会学の中にヨーロッパの知識社会学と根本的に目標が異なって来て、フロムやリースマンのように、疎外、アノミ、孤立、無関心の問題が中心となり、知識社会外で知識社会学的研究がなされるようになって来た。知識は科学知識であり、マンハイムの言うような知識から離れて科学の研究を対象とした科学社会学がマートンを中心として論究されるようになって来た。

参 考 文 献

- 1) Karl Mannheim : Ideology and Utopia .
- 2) ditto : Essay on Sociology and Social Psychology, Routledge & Kegan Paul.
- 3) ditto : Essays on the Sociology of Culture.
- 4) ditto : Essays on the Sociology of Knowledge.
- 5) ditto : Diagnosis of Our time.
- 6) ditto : Man and Society in an Age of Reconstruction.
- 7) ditto : Systematic Sociology, Routledge Kegan Paul, London.
- 8) Robert K. Merton : The Sociology of Science ,Chicago U.P.
- 9) Kurt H. Wolff : Versuch zu einer Wissen soziologic, Luchterhand, Berlin.